

目 次

2016年秋季大会シンポジウム: モンテーニュの思想

はじめに	塩川 徹也	1
自知について — モンテーニュにおける思弁と現実	大西 克智	2
真実、信じられること、可能なこと — 16世紀の歴史論とモンテーニュ	志々見 剛	16
モンテーニュ神論における中世末期ノミナリズムの痕跡	津崎 良典	28

2017年春季大会シンポジウム: 移民

はじめに	加國 尚志	41
アブデヌール・ビダールにおけるライシテとイスラーム	伊達 聖伸	42

2016年秋期大会研究発表要旨

La notion de <<paysage>> chez Michel Serres	Yuiko AGATA	54
« Le cercle archéologique dans <i>L'archéologie de savoir</i> de Michel Foucault »	Yudai SHIMIZU	55
同じものとしての生命—デリダ『弔鐘』読解を中心として	小川 歩人	56
『アンチ・オイディプス』における「コード」と「負債」の意義	木元 竜太	57
独話の対話構造における三人称の機能について — 幻聴における主体の自己構成の問題	本間 義啓	58
ガブリエル・タルドにおける信念と欲望	笠木 丈	59
イメージについて: 『物質と記憶』第一章再読	岡嶋 隆佑	60
デカルトにおける〈欺かれる私〉について — 欺かれるという事態からは何が帰結するのか —	田村 歩	61
物語論と人生全体満足説 — リクール自身の解釈学からの視点	長門 裕介	62
初期ドゥルーズにおける情念と自己知について	得能 想平	63
「原イメージと反イメージ — メルロ＝ポンティとドゥルーズ」	小林 徹	64
『全体性と無限』における社会性について — 意味作用の時間性との関連から —	犬飼 智仁	65
「聖／俗の区別／両義性」	佐々木雄大	66
スピノザのデカルト『情念論』批判 — 『エチカ』第5部序言の分析を中心に —	笠松 和也	67
リクール倫理学はグローバルな正義について何を言うことができるか	川崎 惣一	68
アロンによるフーコー批判 — 規範と認識の観点から	宮代 康丈	69
大他者の欠如と対象 a — ジャック・ラカンによる『ハムレット』註釈の理論的意義 —	桑原 旅人	70

後期デリダにおけるハイデガールの遺産相続 (I) — 「ハイデガールの耳」と責任、贈与	大江 倫子	71
良識ある人間が自然に行う単純な推論が書物より真理に近いのはなぜか — デカルトにおける真理認識の自然性についての一考察	佐藤 真人	72
二つの「自己原因」 — J.-P. サルトルにおける神の問題	根木 昭英	73

2017年春季大会研究発表要旨

共同体の存在 — ジャン＝リュック・ナンシーの哲学の展開をめぐって —	市川 博規	74
出来事の地位をめぐって — マリオン、ロマーノ、現象学の問い —	伊原木大祐	75
ジルベール・シモンドンのアナロジーについて	上野 隆弘	76
最晩年刊行のハイデガールの遺産相続 (I) — 『獣と主権者』第2巻と存在論的主宰 Walter	大江 倫子	77
未開社会の経済学 — ドゥルーズ＝ガタリとマルクスの共通項	木元 竜太	78
精神から生命へ — シャルル・ボネの心理学	沢崎 壮宏	79
ドゥルーズとカント — 『差異と反復』における「内官のパラドクス」解釈をめぐって	多田 雅彦	80
contre-effectuation の二側面をめぐって	平田 公威	81
狂気の呼び声 — フーコーの超越論的考古学とその自己解体 —	藤田公二郎	82
初期レヴィナスにおける「運動」の困難	堀松 辰彦	83
自己・異他触発と一人称の発話 — ジャコブ・ロゴザンスキにおける声の問題	本間 義啓	84
「高邁 (générosité)」の情動的側面の研究	三上 航志	85
バタイユ、ハイデガー、ナンシーにおける根拠の問い — 『無為の共同体』に基づいて —	横田祐美子	86
「老化」と「個性」 — ベルクソン『創造的進化』におけるル・ダンテクへの批判的考察を通して —	米田 翼	87

公募論文

ジャン＝リュック・ナンシーと人格主義	伊藤潤一郎	88
ベルクソン『物質と記憶』におけるイマージュ概念について	岡嶋 隆佑	100
分散と組織化の界面としての身体 — デリダにおける Leiblichkeit 解釈について —	小川 歩人	112
スピノザのデカルト『情念論』批判 — 『エチカ』第5部序言の分析を中心に —	笠松 和也	124
リクール倫理学はグローバルな正義について何を言うことができるか	川崎 惣一	136
大他者における欠如のシニフィアンと対象 a — ジャック・ラカンによる『ハムレット』註釈の		

理論的意義 —	桑原 旅人	148
ドゥルーズの自然哲学序説	小林 卓也	160
デリダにおける倫理の形成 — 「暴力と形而上学」における〈厳命〉 —	鈴木 康則	171
『エチカ』における身体の変化と同一性	立花 達也	183
『意味の論理学』における動詞と時間 — ドゥルーズにおけるギョーム言語論の受容について —	平田 公威	195
シモンドンにおける「情報」と「内的共鳴」	堀江 郁智	207
魂の身体性 — レヴィナスにおける感受性の構造について —	村上 暁子	219
Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu	Hisashi MATSUI	231

特別講演

デカルトの「普遍数学」概念と『精神指導の規則』第二部 — 数学的对象と精神の諸能力 —	フレデリック・ド・ビュゾン (訳 香川 知晶)	242
デカルトの「哲学的で抽象的な存在」と形式存在論	マルク・ペーターズ (訳 田村 歩)	254
Les « Entia philosophica et abstracta » de Descartes et l'ontologie formelle	Marc Peeters	271

書評

山田弘明著『デカルトと西洋近世の哲学者たち』	大西 克智	286
鹿島徹・越門勝彦・川口茂雄編『リクール読本』	原田 雅樹	288
齋藤元紀・澤田直・渡名喜庸哲・西山雄二編『終わりなきデリダ — ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』	郷原 佳以	293
河野哲也著『いつかはみんな野生にもどる — 環境の現象学』	山森 裕毅	298
米虫正巳編『フランス現象学の現在』	本郷 均	303
大山載吉著『ドゥルーズ 抽象機械〈非〉性の哲学』	増田 靖彦	307
藤田尚志・宮野真生子編『愛・性・家族の哲学』全三巻	平井 靖史	312
平井 靖史・藤田 尚志・安孫子 信編『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する 現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』	村松 正隆	316
『共にあることの哲学』岩野卓司編	檜垣 立哉	321
金森修編著『昭和後期の科学思想史』	近藤 和敬	325
金森修・塚原東吾編『科学技術をめぐる抗争』	山口 裕之	330
山上浩嗣著パスカル『パンセ』を楽しむ 名句案内 40 章	武田 裕紀	334

会員の声

フランス語哲学会連合 (ASPLF) 第 36 回大会 参加報告	長坂 真澄	337
----------------------------------	-------	-----

その他

日仏哲学会 2016 年度 (2016 年 9 月-2017 年 8 月) 活動報告		339
--	--	-----

日仏哲学会入会手続きについて	343
2018 年春季・秋季研究大会一般研究発表応募要領	343
『フランス哲学・思想研究』公募論文応募規定	344
「会員の声」投稿規程	344
日仏哲学会若手研究奨励賞規定	345
日仏哲学会会則	345
編集後記	347
Sommaire	